

虹をさがす
才才才三

あるところに、りっぱな毛なみの
オオカミがおりました。

「ボクは一人でなんでもできる。
きょうからひとりで生きていこう。」

ながいあいだ、おせわになりました
オオカミはみなしこの自分の

せわしてくれたクマのおやこに

おわかれのあいさつをしました。

「おわかれをするのはさみしいが

おまえももういちにんまへのオオカミだ。

ひとりでありっぱに生きてゆくがよい」

森の長老のクマのお父さんは、

そういつてオオカミをおくりだしました。

なかよしだったむすめも

いつまでも手をふっておりました。

ひとりになったオオカミは

りっぱな毛なみとたくましい足で

どこまでもはしる事ができました。

「おなががすくまで歩いていたら

どこへゆくだろう」

オオカミはふとそうかんがえて、

山のいただきをみました。

さっきまで雨がふっていた山のむこうに

きれいなはしがかかっています。

オオカミは、あのはしのむこうまでいけば

なにかすばらしいものが

あるのではないのかと思いました。

はじめてあるくみちは、

知らないことばかり。

オオカミはわくわくしながら

先へとすすみました。

1

「どうしたの、急に」

大阪に単身赴任していた御剣みつのさがいきなり成歩堂なるほどうの家
にやってきた。携帯に連絡が入ったので電話に出
たら、『今、駅についた』といわれたので、成歩堂
は驚いたのなんの。よくよく聞けば夕べの高速バス
で早朝に東京に着き、そのままここまで移動してき
たらしい。

「なんでまた急に」

手渡されたバックにはスーツ用のケースが入って
いて、葬式かな、と成歩堂は思った。

「君は今晚、暇か？」

御剣はネクタイを引き抜きながらそう言った。

「え？ 暇っていうか：仕事あるし」

「そういえば、そうだったな。みぬきくんも舞台が
あるのだろうな」

「そうだけど：なんかあるの？」

「うむ。あるパーティーに呼ばれたのだが：せつかく

だから、君とみぬきくんも一緒にどうか、と思った
わけだ」

「…：ふうん：確かにパーティーに出れば、一回分の
ご飯が賄えるね」

「そうだ。みぬきくんにも、そういう場を経験させ
たほうが、後々役にたつのではないかね？」

「そうだねえ：それにあの子、最近成長期に入っ
たのか、やたらとたくさんご飯を食べるんで、ホント
はちよつと困ってたんだ」

そんなことをいう成歩堂に、御剣は心底しかたな
いという顔で頭を左右に振った。

「子供に満足に食事を与えられないなどは、親と
して不足に過ぎる」

「みぬきの食欲を侮っているからそんなことをいえ
るんだよ。この前なんか食べ放題の店に連れて行っ
たら、一人でジャーのご飯、半分以上食べちゃって、
大変だったんだぞ」

「…：そんなに食べるのか？」

「フルーツの皿に山に盛られていたライチ、食べた
数を二百個まで数えていたけど、全然止める気配が

ないんだよねえ。なんだか怖くなっちゃって、途中で止めさせたんだよ」

「それは、なんというか、…すごいな」

そんなことをいいながら、御剣はトレードマークの臍脂のスーツの上着を脱いだ。成歩堂はハンガーを探す御剣の手を握る。

なんだ、と不審そうに視線を上げる御剣の、反対の手にある上着を取って、成歩堂はそれをハンガーにかけた。それくらい自分でしようと御剣はいつも思うのだが、成歩堂は御剣がやってくると、そここそ箸やスプーン以外のものを持たせない勢いで熱心に世話を焼きたがるのだ。

「パーティって、いつから？」

「午後の六時から…だろうか。うム…：時間はまだ大分あるようだ。着替えるのは後にするか」

ふうとため息をつく御剣の、握った手をそのまま成歩堂は撫で始めた。御剣はそれを引き剥がそうとはせずに、成歩堂の勝手にさせている。

「立食パーティだから、今日は何もしないぞ」

「…なにそれ」

「挿入を伴う性行為を求めているなら、私に応じることは出来ないということだ」

御剣はそんなことをさらっと言い放った。

御剣は、前はそういうことを口にするのを、普通に上に恥らって嫌がっていたものだったが、ここ数年は密かな閨の秘め事すら、なんでもないことのように口にできるようになってきた。

無闇に恥らったり、照れたりすればするほど、成歩堂が嬉しがって増長することを、学んだせいかもしれないが。

「…はつきり言うねえ」

「それでもしないと、キミはなにをするか、わからん」

確かに、久しぶりの逢瀬が、こんなにせわしないなんていかにも勿体ないことだ。

めつたに会えないからこそ、少しはそういうことを考えていないわけがない…ではないか。成歩堂はつきり御剣も少しなら…と思ってくれていたのではないのか、と考えていたのだが。

そんなつれないことを言いながらも、御剣がわざ

わざこの部屋に来る必要など、本当は微塵もないこともわかってる。パーティに出るだけなら、都内でホテルに泊まって、そこで着替えれば、じゅうぶん間に合うし、事は足りるのだ。

「それは残念だなあ。——じゃ、代わりにマッサージでもしよつか？ 今、触ってわかったけど、御剣の手、すごく硬くなってるし」

そういいながら成歩堂は握っていた手を離した。成歩堂がみぬきと暮らしているのは小さい平屋の一戸建てで、部屋は二つしかない。コタツの出してある部屋をさつと片付けて、そこに座布団を二つ並べて敷くと、成歩堂は御剣に横になるように促した。御剣はそこに素直に横になり、背を少し押されただけでバキバキ音が鳴るのに苦笑した。

「本当にここでいいの…？」

「うム、間違いない」

フォーマルスーツに着替えた御剣は、それはそれ

は惚れ惚れとするような見事な男振りだった。

着替えを手伝った成歩堂も、しばらく手を止めてじつと眺めてしまったほどだ。

さすがにそんな御剣を一人でパーティに送り出すのはどうにも我慢ならず、成歩堂はつい「ついていく」と言ってしまったのは、だから仕方のないことだったのかもしれない。

御剣はそれをわかっていたからこそ、一緒に来ないかと成歩堂を誘ったのではないだろうかと思われた。

昔着ていたスーツは一枚だけ残してあったのでそれを着ると、とりあえず体裁は整ったようだった。美丈夫な御剣の隣に立つとどうしても、つりあいが取れていないことが際立ってしまうのは仕方ないが、そんな美しい男が恋人であることも、ひそかに成歩堂を誇らしい心地にさせてくれる。

学校から戻ってきたみぬきは、ちようど出かける前に着替えていた御剣の姿を見て、一緒に行きたいと言いだした。

だが、舞台に穴を開けるわけにはいかない。

名残惜しそうにビルバーに向かうのを、駅へ行きながら送り届けながら、パーティの残りものがあったらもらってくるよと、固く約束することになった。どこに行くのかは御剣は教えてくれなかった。

何も言わずに電車に乗り、都心に出れば、さすがに周りの女性の目が、御剣の上をちらちらと過ぎる。隣で彼を見ている成歩堂にはそれがよくわかった。もっともその半分は、成歩堂のほうを気にして掠めているのだ。

だが、成歩堂は自分の評価について、御剣方面以外にまったくその価値を見出していないので、女性たちの視線にはまったく気がついていない。

黒いスーツにキャメルのロングコートの御剣は、どこか葬儀のいでたちを連想させた。だがボケットチーフは明るいオレンジ色、カフスボタンは赤い石のはまった正式なもの、靴はブラウンのウィングチップ：というあたりで、そうとは違うことも同時に知らしめていた。

朝は蒼白に近かった顔色も、成歩堂が丹念に全身にマッサージを施し、しばらく仮眠をしたせいか、

けの秘密に留めておくことにした。

そうでなくても、近くに座っている女性たちが、二人の会話に耳をそばだてているのがよくわかったからだ。

御剣はそれに気づいているのかいないのか、思わせぶりに成歩堂の耳に顔を寄せ、囁くようにぼそぼそと話をする。

さて御剣に促されたのは、ターミナルに近い高層ビル。中層階がホテルになっていて、そのロビーへ向かうエスカレーターに乗せられた成歩堂は、そういえばこれはなんのパーティなのかを聞いていなかったことを思い出した。

まさか警察関係や法曹関係者が、こんな豪華なホテルを借りて催しをするとはどうにも考えにくいし、そもそも自分を連れてゆくのだから、そういう場所ではないと思うのだが…。

「そういえば、これってなんのパーティなの？」

「行けばわかる」

そういつて御剣は案内も見ずにすたすたと前を歩いてゆく。ホテルのロビーにはいくつかの団体の名

明るい桜色に戻っていて、それがいつそう御剣の姿勢美しさを際立たせていた。

御剣はもとから立ち居振る舞いが綺麗で、姿勢がとてもいい。そのためか、見た目以上に背が高く、スタイルがよく見えるのだ。

成歩堂が丁寧にブラッシングしてほこりを取ったスーツは、同じ男でもほればれと見とれるほどの美丈夫に御剣を仕上げていた。

「…何を見ているのだ？」

少し人が増えてきた電車の、並んだ席でひそやかに声かわしながら、御剣が不審そうに問いただしてきた。

まさかその姿に見とれていたとは言えず、適当に言葉を濁せば、御剣は納得しかねたような顔をした。

「御剣がかっこいいから見てた」

素直にそう答えてみたら、御剣はかすかに笑って、

「そう見えるようにしているのだから当然だ」

などと言い放って目を伏せた。

食えない上司の顔をちらりと見せて、窓の外を眺める御剣の、うなじが少し赤かったのは、成歩堂だ

前が書いてあったが、それを確認することもなく、御剣はどんだん先に歩いていってしまった。

真正面の階段を上って、さらに廊下をうねうねと曲がる。その先にまた階段があり、それを上ってから、今度は長い廊下を歩いてゆく足取りは確かだった。

成歩堂はすっかり迷子のような気分になって、ここで御剣とはぐれたらこのホテルから出られないな、とも思った。

「ここだ」

御剣はそういつて、あいているドアをさつとくぐる。入り口に何か書いてあった案内を読み取る時間はほとんどなかったが、どうやら会社の名前が刻まれていることだけはわかった。

クロークでコートを預けると、成歩堂の分も何かのチケットを渡される。パーティの最後でプレゼントがもらえる引換券らしい、と御剣はいうと、それを成歩堂に渡した。

「食事は自由してくれたまえ、私は用事がある」
そういつた矢先、御剣は成歩堂から少し離れた。